

# なのはな通信

第15号 2006.1



編集・発行  
勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 石倉 啓子

## 開設10周年記念祝賀会

1995.4.1～2005.4.1

勤医会東葛看護専門学校



### 「一人ひとりを大切に」大切さ

校長 山田 功



よく「一人ひとりを大切に」教育」と言われますが、この学校に着任して、その本気度が半端ではないことに気づかされました。

今年にはキャッティングセレモニーが二度も行われました。それは病気で参加出来なかった「O君のためのキャッティング」を実施することをクラスで決めたからです。本人には内緒で、体育館にステージが準備され、そのフロアーには病氣回復を願って折られた「万羽鶴」の花道が敷かれました。驚きの中で入場したO君は拍手に包まれ、涙のセレモニーになりました。学びの世界の大変さを知っているからこそ「お互いに支えあつていく」実践が生まれている、と思わされた瞬間でした。

たしかにプロの看護師を目指す道は、険しいと感じることもあります。総合実習で患者さんに接して、指導者から「あなた方は、まだ鎧を着ているのではないか」と指摘され、グループの全員が考えて集団討論になったことがあります。二歩引いている自分、常に周囲を気にする自分、卑屈さを笑顔で隠す自分：と自己分析をする発表者の姿に、真摯な人達だな、と尊敬の言葉も出て「鎧」の論議が盛り上がりました。そして「自分が嫌われたくないから」ではなく、「患者さんのために今何が必要か、何をすれば良いのかを、一生懸命に考える」その時に鎧を外していられる自分になりたい、という気持ちで教室に生まれていきました。

期待と不安がドキドキすることを「ときめき」と言うのだそうです。十二月の『ときめき探検(学校見学説明会)』では、看護師に挑戦する若者に、「私も十月に校長になったばかりで、ときめきの真つ最中」と言わせて頂きました。東葛祭、研修旅行、実習、授業、ゼミなど、学びと向き合う学生・教職員の活気に、期待のドキドキが大きくなり、心が動かされる毎日です。

しかし窓の外は厳しさが増す時代。こんな時だからこそライフワークの教育基本法・憲法を生かす運動に全力を上げ、みんなで三上満前校長の教えを受け継ぎ「一人ひとりを大切に」学校をさらに目指して行きたいと思っています。新年もまた、どうかよろしくお願い致します。

## 開設10周年記念

一九九五年に開校した本校は今年十周年を迎えました。

この間に六四一名の卒業生を臨床に送り出すことができました。

また看護教育界でも本校の教育実践は一定の影響力を及ぼしているのではないかと思います。三上（前）校長が



同窓会から三上先生・久保先生に  
ありがとうございますの花束を



青春を踊る教員・学生・卒業生たち



相変わらずの1科5期生+α



民医連の看護学校の先生方

日本看護学校協議会の常任理事を勤め、全国の看護学校で本校の教育実践を紹介し、注目されていることから伺えます。

十年経って改めて、この学校を創ってよかった」としみじみ感慨を覚えるとともに、今日まで応援していただいた、多くの方々に感謝の念で一杯です。なかでも学生に豊かなフィールドを提供していただいた地域の方々、また民主的な教育の実践者の方々からの応援はなによりの励ましでした。

十周年企画として以下の三つに取り組みました。

- 一、学校案内パンフの改定
- 二、教育実践十年のまとめの編纂
- 三、記念祝賀会

現在の教育・医療・平和を巡る情勢を踏まえ、十年間の本校のあゆみを振り返ると、改めて、「日本国憲法」と「教育基本法」を教育理念に据え、「学生が学ぶ主人公」として育つことを保障する教育の意義：つまり、技術教育をとおしながら、ひとが人として育つ、本来の教育を追求してきた本校の存在意義がひととき再確認されるように思えます。

先日「卒業論文発表会」がありました。学生たちの学びに集約されていたものは、本校に入学してくるまでの生

活の中で背負わされていた重荷：傷つき、他者も自分も信じる事ができない閉塞感と孤独から、本校の三年間で、自分や他者への信頼を取り戻し、なおかつ、患者さんへの思いから出発し、社会に目を向け、安心して医療を受ける権利を追求したいと心から思えるまでに成長する姿がそこにはありました。

本来に、本校の存在意義は何なんだろうと、また深く考えさせられました。

本校の十年は『学生とともに歩んで』という冊子にまとめました。ご一読ください。ご購読をご希望の方は学校にご連絡ください。



子連れで登場1科1期生

九月十七日

開設十周年記念祝賀会

本校の体育館で開催しました。参加者は約二五〇名です。

第一部はセレモニー

三上校長、伊藤副理事長より、主催者あいさつ

ご来賓の方々のごあいさつ

日本看護学校協議会会長の山田里津さまよりごあいさつ

第二部：学生が主人公

本校らしく、1科2科の卒業生と在校生が主人公の企画としました。

一期生から十一期生までクラスごと



に登場し歌あり、踊りあり、ギター演奏あり。

どのクラスも本校で過ごした青春の日々が甦るようでした。

最後に多彩な参加者の一部をご紹介します。

民医連の看護学校から五名。千葉県内の看護学校から二名。講師の先生方八名。また、本稿の教育方針を反映する

のかのように地域フィールドの協力者の方々と地域の健康を守る会の方々に多数参加していただきました。フィナーレは『若者たち』の大合唱。全員で

肩を組み歌いつづけました。



“崖っぶち少女隊”を生んだ1科7期生

また、番外編ですが祝賀会終了後二箇所でもう一つの十周年。

ご参加いただいた民医連の看護学校の先生方とミニ交流会を行い、「学生を大切に教育ってなんだろう」



健康学習会の歌を歌う2科9期生



2科7期生  
福島からはるばる来ました  
みんなちょっとずつキレイになってます

と熱く語り合いました。また、ある卒業生たちは、この日にクラス会を開き、クラスを越えた三〇数名が明け方まで語り明かしました。

(石倉 記)

## 原水爆禁止世界大会に参加して

私は今回の原水爆禁止世界大会が二回目の参加となりました。分科会で「青年のひろば」に参加し、集まった青年たちと共に地域の被爆者の方々のお話を聞きに行きました。被爆者の方の中には、この日、初めて大勢の前で被爆の体験を語るという方もいらっしゃいました。自分には先がないから少しでもたくさんの人に事実を伝えていかなくはいけないと思ったと語ってくれました。戦争を体験したことのない私が、聞いているうちに耳をふさぎ

たくなることや、涙がでることが何度もありました。しかしそれは被爆者の方が六十年前、実際に自分自身で体験した事実なのです。「戦争は生きることとを全否定する」私はこの被爆者の方々の血を吐くような叫びを受け止められないような人間にはなりたくないと思いました。戦争で亡くなった方々の命の重みを背負って私は今、平和な日本に生きていられるのだと強く感じました。

原水禁に参加したことで、世界各国や日本中から集まった人たちと学ぶことや、被爆者の方の体験を聞かせていただくことができ、平和の大切さを再確認することができました。そして何



より、こんなに頑張つて署名活動や、学習会、地域の被爆者を招いての講演会などを行つている人たちがいることを知り、とても励みになりました。核保有

国であるフランスの青年の「あの原爆を落としたのは私たちと同じ人間なのでしょか。私は人間ではないと思えます。」という言葉が忘れられません。核保有国の青年がそのような考えを持つてくれていることをとても嬉しく思いました。

原水禁で「思つても何も言わない人は何も思つていないのと同じ。一言でもいい、何か言つてほしい。黙つているのは危険です。」というお話を聞きました。私はその時ハッとしました。今、日本は憲法九条が変えられようとしています。少しずつ戦争ができる国に変えられようとしているのです。しかし、それに気付いていない人もたくさんいます。だから気付いた人からどんどん声を上げていかな

いと、六十年前に亡くなった方にも、現在勇気を振り絞つて被爆の体験を語つてくださった方にも失礼だと思ひました。原水禁に参加して「たくさん学んだ。励まされた。」と、それで終わるのではなく、一人でも多くの人に学



んだことや感じたことを伝えて初めて参加したことになるのではないかと思ひます。

最後に、私は、看護とは生きることとを応援することだと思ひます。戦争は命を奪つて、生きることとを否定します。看護師を志す者としても、一人の人間としても、私は戦争に反対です。

(1科1年 山田 絵美留)

# 第11回 東葛祭

## 「LOVE & NS & PEACE」

勤医会東葛看護学校第十一回東葛祭は、二〇〇五年十月一日（土）二日（日）に開催されました。

この東葛祭では、1科・2科のクラスや学年に関係なく交流し、看護師を目指す者として仲間意識を育むこと。更に、地域に開かれた学校として、地域の方々とも交流する場として位置付けられています。

今年のテーマのLOVE（愛）には患者さんや地域の方に愛を持って接しよう。PEACE（平和）には平和がなければ患者さんの人権は守れない。そして、NS（看護師）が真ん中にあるのは、愛と平和の間で医療が成り立っているという思いが込められています。



今年は二・三年生が実習だったために、一年生に負担がかかってしまい、なかなか全学年が集まらない中で東葛祭でした。意志統一が難しく、意見がぶつかり合う事もありましたが、結果として交流を深める事ができました。

東葛祭一日目は、ベトナムでの枯葉剤被害を記録し続ける報道写真家の中村梧郎さんを招き、お話を伺いました。特に印象に残っているのは、枯葉作戦によるダイオキシンの人体・環境への被害の大きさです。ダイオキシンは汚



員による『この子たちの夏』の朗読劇の発表を行い、活発な意見交流が出来ました。

二日目は出店やフリーマーケット、縁日やお化け屋敷など多くの来客者があり、地域の方々との交流をはかりました。特に野田さん展示会では、野田さんと全校生徒とがコラボレーションした作品が展示されることで、地域の方々や学校・学生との関係が、よりいっそう深まったことと思います。

毎年恒例の後夜祭は、多くのクラス出し物や有志の出演で、爆笑につぐ爆笑。おおいに場を盛り上げました。漫才や女子校生の姿で踊ったパラパラ、男子学生によるギターの弾き語り、どぎついメイクで踊ったゴリエちゃんなど、我を忘れて楽しめました。準備の為の日程が大変で、実行委員もパラパラになっしまいましたでしたが、結果として大成功で東葛祭を終える事が出来ました。これからも地域の方々と共に造っていきけるような東葛祭が、毎年続く事を願います。

（第十一回東葛祭実行委員

1科九期生 丹伊田 友紀

看護1科1年生  
(11期生)

## キャッピング セレモニーに 向けての取り組みを振り返って



十一月二十七日、看護第1科十一期生のキャッピングセレモニーが行われました。しかし、ここまで辿り着くのに様々な問題がありました。こんな状態でキャッピングに臨めるのか?という気持になる事もありましたが、キャ

ッピングを機に十一期生が少しずつ成長できればと思い直しました。一番大変だったのが決意文でした。決意文は、私達がどんな思いを抱き、看護の道を歩んでいきたいのかを皆さんの前で表明するという事で、どう決意文にするか実行委員で話し合いました。これまでの実習を通して、全グループの共通のテーマを五つ挙げ、そのテーマに沿ってより深く考えてもらう事にしました。連日、グループ内での話し合いが行われ全体を合わせた決意文が出来上がりました。しかし、私たちの決意文は自分たちにしかわからないもので、抽象的なものになっていました。「これでは皆がどんな事からこの学びを得たのかわからないよ。」再度クラスで話し合いました。決意文を良いものにしたと放課後も残って頑張る人もいました。皆の力が結集し、決意文を完成させる事ができました。決意文が完成した後は、実際に動きを加え練習に励みました。キャッピング中に流すBGMもこだわりました。十一期生



らしく、「笑いあり、涙あり」の感動できるBGMを選曲しました。キャッピング当日、厳かな雰囲気の中決意表明は始まり、感動して涙があふれてきました。パン帽からナースキャップに変わり、一人一人新たな気持ちになりました。この決意を胸に、これからの実習や学習に励みたいと思います。クラスで意見がぶつかり合う時が何度もありました。でも、ぶつからないことな

んて有り得ないし、ぶつかっていったもきちんと受け止めてくれる仲間がいました。十一期生は団結できるすごい力をもっています。看護師になるための道のりは長くこれから本当に大変になっていきます。辛い時もいっぱいあるかもしれませんが、皆で力を合わせて十一期生らしく成長していきたいと思えます。

(1科11期生 金 朋架)



「日本国憲法と  
平和と医療」を  
学ぶ旅 沖縄へ

私達、2科十期生は日本で唯一の地上戦が行われた沖縄へ行く事で、身近な所から戦争についてもっと深く学べるのではないかと期待を抱えて研修旅行にのぞみました。

初めて行く沖縄は予想以上に暑かったが、人も気候もとても明るくていいなあという印象を持ちました。一日目と二日目はいくつかの戦地を巡りました。ひめゆりの塔や、その資料館では自分達の年齢に近い女の人達が沖縄戦争中、学生であるにも関わらず壕の中で戦争により負傷した人達の看護をしていた事を知りました。ひめゆり学徒の一人だった宮城喜久子さんからは当時戦争中の生活を聞かせて頂くことができました。アメリカ兵の恐怖にたえながら、毎日毎日戦争で傷付いた人達

を血まみれになりながら看護していた事。友人や先生が戦争になり目の前で亡くなっていくのを見た事。どれも本当に生々しくて信じられないものでした。もしも自分が当時その場に居たならば耐えられずに自決を考えるだろうとも思いました。宮城さんは「信じられないのが戦争」と話していました。全くその通りだと思

い、改めて戦争は無意味で残酷すぎるものだと思います。



前にある綺麗な海が戦争により水平線が見えなくなるぐらいまで埋め立てられてしまう危機にあり、それをくい止める為五百日以上もずっとテ

ントを張り座りこんで、政府に訴え続けている事を知りました。また、事前に配られていた紙やお話の中で、守る会の人達は常に非暴力を貫き自分にも周りにも厳しく行動しているという事も知りました。それは

二日目には辺野古へ行き私達は座りこみに参加しました。命を守る会の方のお話を聞き、今自分達の目の

本場にこの訴えを聞き入れて欲しいがために守り通しているんだと感じました。また、イラク戦争に関わっていないように密接に関わっている

日本と日本のお金は、イラク戦争で亡くなった人達の死に繋がっている事も改めて知る事ができました。戦争をしない事はあたり前の願いなのになかなか受け入れられない現実の中、ずっと毎日座り込む事で訴え続ける沖縄の人達の姿を見て、その強い思いに感動しました。また座りこみをする事で、海上ヘリポート建設計画が止まったり、小さくなっている事も知り住民の力で多少なりとも変化が起きている事が分かり、とても励まされました。私はこれまで先輩のレポートを見たり、事前学習をして、戦争の無意味さを日々感じ学んできたが、実際自分がどのような事をしていったら良いのか分からなかった。しかし今回、研修旅行へ行き学んだ事感じた事を学校の人や家族、友達に伝える事で、自分も平和を願う一人の人間として今ある現状を少しでも変えていけるのではないかと思います。

(2科十期生 池田 由佳)

# 皆さんさようなら

## —人生の第六楽章へ

### 三上 満

老教師になりたくて

東葛看護学校での五年半は、私の人生にとって第五楽章でした。それもラブルゴのようなまたメヌエツトのような、優しく美しい、味わい深い日々でした。

じつを言うと、ちょうど五十歳で教職員組合の専従となり、教育現場を離れた私は、教師として何かやり残してきた思いを抱いていました。それはおだやかで優しい老教師になることでした。

失敗も多いけれど若さに溢れ、子どもたちと兄弟のようにすごした青年教師時代はたっぷりありました。力がついてきて、荒れる子どもたちとも結びつき授業にも生活指導にも打ちこんだ。金八先生。時代も又たたっぷりありました。しかし私にはおだやかな老教師時代がなかったのです。

都知事選（一九九九年四月）の候補者活動も終わり、ひと息ついたころ、私はむしろ老教師になりたくなりました。そこへ降って湧いた

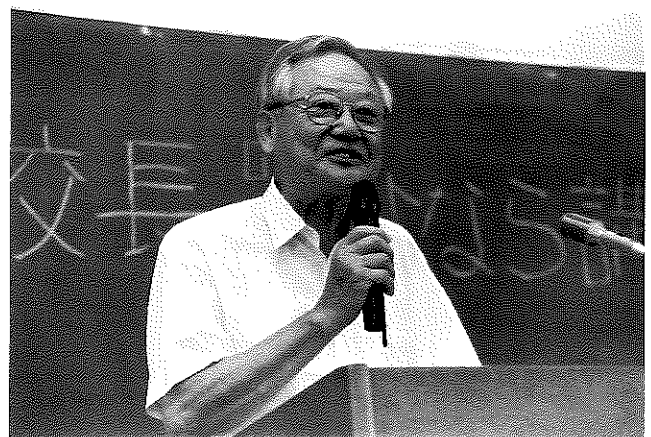
ような「東葛看護学校の校長にならないか」という話です。私にはほんとは夢のような話でした。それから五年半、大勢の学生とともに学び、親しみ、睦み合うことができ、今何か「我ながらよくやってきたな」という、さわやかな満足感で退くことができます。教職員・学生・父母の皆さん、ほんとうにありがとうございました。

なぜ第五楽章だったのかの説明を少し付け加えなければなりません。それは私の最終講義のあらましと重なります。

第一楽章 少年の頃戦争があった

第一楽章は、少年の頃の戦争でした。中学一年の三月、深川にあった私の家（石川島重工の寮）は、三月十日の東京大空襲で跡かたもなく焼け、私たち一家は焼け出されました。

「海の方へ逃げろ」の父の声で、私たちは海をめざして逃げ、水上生活者のはしけに救われました。私は妹をおぶって逃げ、兄は貴重品（非常



持ち出し）の箱を背負って火の中を走りました。ところがはしけに乗って兄がやっと降ろした箱は、ボロ切れ、古新聞などのつまった箱でした。兄が箱をまらちがえて持ってきてしまったのです。「しょうがないよ、暗かったんだから」と叱らなかつた母の顔を思い出します。疎開生活の辛かったこと、栄養失調になりかけたことなど、戦争からむ思い出はたくさんありますが、もう紙数がありません。



## 第二楽章 自己探求の日々

第二楽章は、青春の自己探求がテーマです。高校から大学へ、青春のまつただなかで、私も「いかに生きるべきか」「生きることの意味」を真剣にみずから問う青春の一人でした。高校時代の文化祭のクラス演劇で、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」をやり、主役のジヨバン二役が私でした。

「ぼくあんな大きな闇の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうの幸い探しにいく」と、粗末な舞台上で叫んだことも忘れられません。こうして賢治と出合い生涯の友として生きるようになりました。激しい失恋、自己嫌悪、自分のゆく道がつかめない苦悩の日々の中で、ある時出合ったのが寮の壁にあつたひとつの落書きでした。

Ich will dem Anderen nahe sein  
Ein Mensch unter dem  
Menschen

ドイツ語ですが「私は人びとの近



くにいたい、人びとの中の一人の人でいたい」という意味です。エリートになつて人びとを見下すのではなく民衆とともに生きる。私は探りつづ

けていたものによく出合ったように感じました。そして「人びとの中で生きる」ことができる仕事として教師になる決意を固めたのです。「私たちは二度この世に生れる、一度めは存在するために、二度めは生きのために」ルソーの有名な言葉ですが、私もこうして二度めの誕生をやりとげたのです。

## 第三楽章 子らを信じて一教師時代

第三楽章は、子どもたちの可能性を信じてとりくんだ教師時代です。新卒で未熟だったころ、生徒たちは私にいろいろなことを教えてくれました。また私の未熟さを厳しく批判し、時には励ましてくれました。生徒たちが私について書いてくれた作文を今でも大事に持っています。生徒たちから叱られ励まされて、私はいかに教師らしくなっていきました。未熟さもあり、失敗も多かったです。教師でしたが、ただひとつやってこなかったことがあります。それは生徒を裏切ることです。子どもを見放

したりおとしめたりすることはしませんでした。それが教師時代の私の誇りです。

## 第四楽章 平和と民主主義のために

第四楽章は、平和と民主主義、よりよい社会をめざしてたたかった日々のことです。学校と教育におそいかる権力からのしめつけ、教育の自由を奪う抑圧とたたかわなければ、子どもたちをのびのびと育てることはできません。とりわけ中学を卒業してもゆき場のない子どもを生み出す受験競争と、それを激しくする選別・差別の教育とたたかわなければ中学生たちの笑顔は戻ってきません。私はそういう大きな立場に立つために、大好きな子どもたちのもとを離れて、教職員組合の専任になりました。さらに「教え子を再び戦場に送るな」と、平和運動や原水爆禁止運動にも参加しました。

そして一九九九年、平和と民主主義、くらしを守るたたかいの集大成として、私は東京都知事選に立ち、

石原慎太郎候補と正面からたたかいた、敗れはしましたが六六万票という大きな支持を得ました。たくさんのお年寄りから「三上さん、福祉守つて！」と拝むように握手された感触を忘れることもできません。

#### 第五楽章から第六楽章へ

そして第五楽章、看護学校の日々です。私の部屋にはこの三月卒業した2科十期生からもらった手書きの「感謝状」が飾られています。私からもらったどの賞状よりも嬉しい感謝状です。それにはこう書いてあります。

「あなたの表情筋がকাশし出す笑顔は日本一、いや世界一です。その笑顔にどんなに癒されたかわかりません。その大きな愛に感謝し、ここに感謝状をおくります。」

これはほんとに「ほめすぎ」です。しかし、私は何のために、何をしに学校へ行っているんだらう、看護のことも医学のことも何も知らない私が。抱きつづけていたこの問いにやっとなんて答えをもらったのがこの「感

謝状」でした。「ああ、私は若い人たちにこれを届けに行っていたんだ。波乱の中を、それでも前を向いて生きてきた人間の生きざまを、その中で得た人間への限らない信頼を。」

考えてみれば五年半、私ができたほとんど唯一のことは、看護を学ぶ皆さんに、励ましを送ることでした。廊下や教務室で会えば「元気か？」と声をかけ、「しつかりな」とハイタッチし、信頼のあらわれとしての「笑顔」を送りつづけることでした。学生の皆さんも「まんちゃん」と親しく呼んでくれ、私もその呼びかけが嬉しく、生きる励みになりました。これからいよいよ第六楽章、「人びとの中で生きる」青春の日にみつけたこの生きざまから決して離れることなく、とりわけ憲法九条をめぐる大きな対決をはらむ時代に遭遇したひとりの人間として生きつづけていきたいと思えます。皆さん、ほんとうにありがとうございました。

## ようこそ先輩



真剣に申し送りを受け夜勤に入る鈴木さん

一九九五年看護学校に入学し流石に任んでもう十一年。私の学校時代のなかで看護学生だった時、一番楽しくて、生き生きしていたように思います。頭の回転は遅く勉強はなかなかでしたが、知ること、理解できることが楽しくおもしろいものだと思間と共に実感してきたように思います。

薬害エイズ、沖縄、平和：いろいろな考え方があり仲間で意見を出し合い、煮詰め、教職員に助言をもらいな

がら自分達のできる力で行動を起こせたことが今社会に出て大きく自信や誇り、次の行動へとつながっています。

(薬害エイズ人間の鎖厚生省抗議行動 平和ゼミ創立 沖縄研修旅行)

なんで私達がこんなことするの？ 憲法？意味あるの？と意見はたくさんでました。今、働きながら一番大事なことだったと確信しています。私達医療者の仕事は厳しいものだと思います。誠実な人間性も求められ、なおかつ確実な技術、知識と理解と実践が必要なのですから。

現在子三人の親子五人暮らしですが子どもが授かったことにより親としてまた周りの仲間や子ども達に育てられてきました。今は子どもをもちながらも働き続けていけるよう、活躍していきたいと思っています。要求し続けて、労働条件の改善は勝ち取っていくもの、と三人産んでようやく学びました。労働者の権利、知ることは力なり。団結すれば一番強い、ここでも仲間はやっぱり大事。

最後に私の恩師でもあり、心の支えでもある石倉先生をはじめ諸先生方。故板宮主事、石田先生に深く感謝し、これからも頑張っていこうと思えます。

(1科1期生 鈴木 めぐむ)



1科1年生の実習で学生に  
アドバイスする廣瀬さん

突然病棟の電話が鳴り、学校からの「なのはな通信」の依頼がきた。私が第一回目ときき、はつきりいつとまどいがあった。なぜ私なの？私なんか書いてもいいの？ということもいがあった。しかし、一人目ということ、自由に書いていいと言われ、悩んだが、引き受けることにした。まず私がなぜ看護師になろうと思ったのかを書こうと思う。

私が小学二年生の時、母親が癌で亡くなった。乳癌からはじまり、全身転移で三十八歳の若さでこの世を旅立った。その当時入院していた母を何度も見舞った。その時の看護婦さんはやさしく、すごく気づかってくれた。その後、父親から将来は看護婦になればいいとすすめられ、その時は深く考えず「うん」と言った。月日が流れ、小学六年生の冬、私のすぐ横で突然祖父が「ドスン」という音をたてて倒れた。祖母は「いつものジョウダンよ。」と言ったが、すぐに「おじいちゃん、おじいちゃん」と大声でさげんだ。祖父は、大きなイビキ様の呼吸をして、呼吸が止まった。その時の私は、どうしてよいかわからずオロオロし、何もできず、自分が情けなかった。そのころがあり、絶対に看護婦になり、人を救って、人のためになる人間になると心に決めた。

はじめに准看の学校に言っていた時は、このまま准看でいいや。進学しなくても看護婦としてやっていけるしと思っていた。しかし、父親から絶対に正看護婦になったほうがいい。とすすめられ、シブシブ受験した。東葛看護学校に入ってもおどろいたのは、一期生ということもあるが、とにかく決められた「ワーク」がない。先輩がいらないからどうしたらよいかわからないづくしだった。そうした中ですべてみんな話して決めていった。『患者の要求から出発、病態を科学する』と言われ、准看の時と比べ、心の中で葛藤があった。実際話をきいていくと、病態と結びついていく。今でも学生が悩まされているだろうレポートの山。何度も学校で夜明けをみた。みんなポロポロだったが、やりおえた後の爽快感、この感覚は東葛の卒業生にしかわからないと思う。このおどろきと楽しさが、東葛看護学に入ってよかったと思う。そして看護師となり、今どれだけ、人のためになっているか、悩みつづける一生のテーマかもしれない。

(2科1期生 廣瀬 泉)

## 編集後記

二〇〇六年が明けました。今年もよろしく願います。

昨年は、日本の構造が大きく転換させられた年でした。

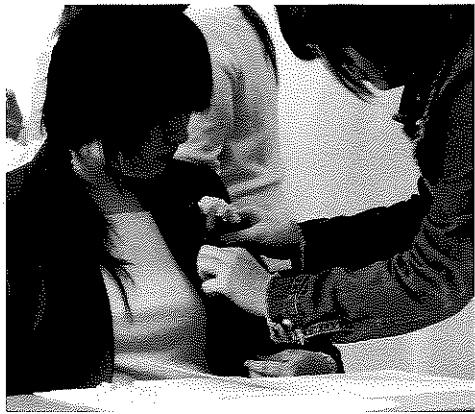
今年はいよいよ「医療」と「教育」に手がつけられようとしています。私たちのもとも身近な分野です。これ以上どう痛みを分かとうと言うのでしょうか。

先日2科の卒論ゼミで学生たちが報告した言葉が心に残っています。「人間は一人ひとり、かけがえない命があり一生懸命生きている。：現在行われている改革は数字や統計のみで考えられ、その数字や一目盛りは血が通っている人間だという当り前のことが置き去りにされている」と。新鮮な感性にドキツとする感動と共感・怒りを覚えました。そして「看護とは、患者さんが豊かな生活を送れるように、一人ひとりの人生を応援すること」と看護観を構築していました。

あと数ヶ月で、彼女らは卒業し臨床へ巣立っていきます。ともに「命を守る医療・看護」が実践できるような社会を目指して頑張りたいたいと思います。

なのはな通信編集委員会

石倉啓子、伊波すみ子、徳丸美津子



入 学



稲刈り

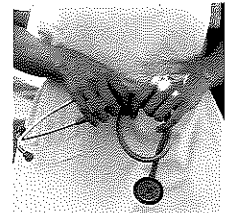
キラリ  
学ぶ青春  
2005



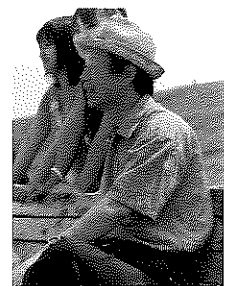
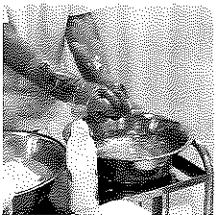
三上校長



卒 業



山田校長



生活・労働フィールド



学内実習



東葛祭



学内実習



小林功・モノクロ写真館